2023 年8月6日 久宝教会 平和聖日礼拝メッセージ

「必要なことは一つだけ」 牛田匡牧師

聖書 ルカによる福音書 10章 38−42節

「必要なことは一つだけ」と言われると、それ以外は「必要ではないこと」と思うのが、素直な理解かと思います。たくさんある選択肢の中から、一つだけ正解を選び出すテストのように、「正解は一つ。後は全部、不正解」……。確かに、初めから想定している答えにたどり着くように問題が設定されているテストや、答えが一つしかないように予め考えられているクイズの場合は、それで良いかと思いますが、私たちの日々の暮らしの中では、むしろ「正解が一つだけ」ということの方が、珍しいのではないでしょうか。「あれもしたいし、これもしたい。どちらも選び難い」というような事が、毎日、小さな事から大きな事まで、たくさんありながら、それでもなお、その場その場で、それぞれの人が選び、判断しているのが普通ではないかと思います。

今日は８月の第１主日ということで、「平和聖日」ですが、同時に 78 年前に広島に原子爆弾が投下された「原爆の日」でもあります。世界で「平和」を望んでいない人は誰もいないと思いますが、ロシアとウクライナの戦争がますます泥沼化して続けられているように、双方とも「平和」を求めて戦っていると主張されますし、それぞれの国にとっての必要があり、正義があるがために、未だに休戦協定に至っていません。このような現状の中で、今回の聖書のお話から、私たちは何を聞いたらよいのでしょうか。

今回の聖書のお話の主人公は、マルタとマリアという名前の二人の姉妹です。二人はイエス様ととても親しかったようで、イエス様は近くに来ると、彼女たちのお家を時々訪れていたようで、彼女たちの名前は「ルカによる福音書」と「ヨハネによる福音書」の中に何度も登場しています。今回もそのような場面でした。旅の途中で姉妹の家に立ち寄られたイエス様を、二人は歓迎します。家の主人は男性が当たり前の時代であったにもかかわらず、ここには夫も父親も登場しませんので、恐らく姉妹二人暮らしだったのでしょうか。マルタは、イエス様をもてなすために忙しくしていました（40）。一方で、妹のマリアはイエス様の足元に座って、そのお話に耳を傾けていたようです（39）。

どれくらいの時間が経ったのかは分かりませんが、「マリアも、こっちに来て、ちょ

っと手伝ってちょうだい」というような、姉からの声かけが何度かあったのでしょう。それでも動かない妹の姿にマルタは業(ごう)を煮やして、ついにお客様であるイエス様に対して「主よ、姉妹は私だけにおもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください」（40）と言ってしまいました。イエス様を歓迎したくて、一生懸命になっていたマルタに対して、イエス様は言われました。「マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことに気を遣い、思い煩っている。しかし、必要なことは一つだけである。マリアは良いほうを選んだ。それを取り上げてはならない」（41-42）。このイエス様の言葉は、何を意味しているのでしょうか。イエス様のために一生懸命に食事の用意などをしていたマルタは間違っていて、イエス様の足元に座って、話を聞いていたマリアの方が正しい、偉い、ということでしょうか。

このお話が聖書に記されてから、約 2000 年の間、教会はこのお話をそのように読み、理解して、人々に伝えて来ました。つまり「イエス様のお話に耳を傾けること、神の御言葉、教会の教えは、衣食住などのこの世の日常生活よりも尊く、優先されるべきものであり、人間にとって最も必要なものである」「自分で考えて、忙しく行動することよりも、黙って神の前に、教会の前に頭を垂れて、従順になるべきである」ということです。何故そのように読み、理解し、人々に伝えてきたのか。それは、そのように人々に理解してもらう方が、国家権力と結びついた教会組織にとっては、都合が良かったからです。余分なことを考えたり、詮索したりはせず、ただ上から言われたことに黙って従ってもらえたら、権力者にとって、そんなに都合の良いことはありません。

しかし、2000 年前に、実際にこの地上の歴史の中を生きられたイエス様は、常に権力によって弱く小さくされていた側の人間として、寄り添い合い、助け合っていました。そんなイエス様が、ここで何故、急に権力側に立つ物言いをされたのでしょうか。それは、イエス様自身の言動というのではなく、そのイエス様の物語を書き記した（男性）知識人たちと、それを読み解き、語り伝えて来た教会の（男性）指導者たち、そして現代の日本語に翻訳する際の翻訳者たちの偏見、「キリスト教、神様はこういうものだから」という先入観が、影響しているのだと考えられます。

例えば、42 節「必要なことは一つだけである」というのは、「正解は一つだけ」「マリアが一等で、マルタは二等」という前提で理解した際の翻訳です。しかし、お客様をもてなすのに、食事を用意したり、寝床を用意したり、諸々のことをしたりす

るのも大切なこと、必要不可欠であることは、小さな子どもの目から見ても明らかです。むしろここでは、必要なことは「一つ」と訳すのではなく、その人「一人のもの」として訳す方が適切です。つまり「必要なことは、その人一人のものである」、だから「必要なことは人それぞれ」となります。そして、この方がイエス様の言葉としては、ふさわしいように感じられるのではないでしょうか。「マリアは自分にとって、良い方を選んだ。だから、あなたはそれを取り上げてはならない」……。

マルタが家の主人として、イエス様をもてなそうと忙しくしていたこと、それもマルタにとっての必要でした。彼女が一生懸命に、誠実に、取り組んでいたことを、イエス様は否定したのではなく、あくまでも妹のマリアの必要を「取り上げてはならない」と言われたのでした。マリアにはマリアの必要があり、マルタにはマルタの必要がある。正解は一つではありません……。現代社会に生きる私たちはこれまであまりにも「二者択一」や「答えは一つ」という価値観に、慣らされ過ぎて来てしまっているのかもしれませんが、本来は一人一人がもっともっと自由な発想で生きられるのではないかと思います。

では、「必要なことは人それぞれ」と言った時、戦争の問題はどうなるのでしょうか。一方の国には一方の国の必要があり、理由、正義がある。そして他方の国にも他方の国の必要がり、理由があり、正義がある……。それらをただ認めるだけでは結局、対立や紛争は無くならないではないか、という問題です。その問題に対して、ヒントをくれているのが、アリス・ミラーという心理学者の「虐待・暴力の連鎖」という考え方です。今から考えると「狂気」としか思えないような、ユダヤ民族絶滅を行ったナチス・ドイツのアドルフ・ヒトラーが、どうしてそのようになったのかについて研究したアリス・ミラーは、戦争や犯罪など、あらゆる反社会的行為の源泉は、乳幼児期からの暴力の連鎖だと分析しています。どんな犯罪者でも、生まれた時から犯罪者であるわけではありません。ヒトラーもそうでした。ヒトラーの世代が子どもだった 19 世紀末の時代、ドイツには非常に厳格で暴力的な教育方法が広がっており、子どもたちは家庭でも学校でも激しい暴力にさらされていたそうです。彼も父親から日常的な暴力を受けて育っていたため、彼の政策は自分が受けた暴力を、全人類に対して「やり返す」性質のものとなりました。そしてそのような政策をドイツの多くの国民もまた、自分自身の衝動に一致していると感じて支持したために、ナチス・ドイツの暴走が生じたのではないか、という分析です。

そしてそのような「虐待・暴力の連鎖」は、ヒトラーや、ナチス・ドイツだけの問題ではなく、現代の日本にも連綿と息づいていますし、それこそ人類の歴史が始まって以来、何千年、何万年もずっと続いて来ている事なのだと思います。自分自身が満たされていない、大切にされていない、思い通りに事が運ばないと感じている一方で、誰かがそれを上手にこなしているのを見ると、その相手を妬んだり、恨めしく思ったり、攻撃したくなったりする衝動が生じるのは、決して自然なことなのではなく、自分の中の素朴な思いや、素直な感情に蓋をして、感情を押し殺し、抑制するという暴力、虐待の産物だと言うのです。そのように考えると、私たちが良かれと思って、やって来ていること、また自分たちも受けて来た「教育」や「しつけ」と称するもののほとんどは、暴力であり、虐待の連鎖であるという驚くべき事実に向き合わざるを得なくなります。

確かに、自分の心に嘘をついて、自分の心がちっとも穏やかではなく、平和ではないのに、表面的に「仲良くしましょう」「平和を守りましょう」と握手をしても、内実が伴っていなければ、その約束は空しいものです。お互いが心から満足しているからこそ、初めて相手のことも大切にすることができるのではないでしょうか。「ヘブライ語聖書」の「箴言」4章23節には、「何を守るよりも、自分の心を守れ。そこに命の源がある」（新共同訳）という言葉がありますが、私たちに自由を得させる「真理」（ヨハネ 8:32）も、「私は道であり、真理であり、命である」（ヨハネ14:6）と言われたイエス様も、決して「これが真理である。神様の御心である」「だから自分の思いや計画は、全て後回しにしなさい」というような抑圧的で暴力的な命令はなさらず、ただ「自分を大切にするように、他人を大切にしなさい」と仰られただけでした。

神様がそれぞれに「良いもの」として創られた全ての命が、それぞれに満ち足りて輝いて生きることが出来るようになることを、神様は喜ばれ、望まれています。その意味で、私たちが目指すべきことは、他人の必要を抑制したり、取り上げたりしなくても済むように、「それぞれの人が、それぞれの必要を満たされる」こと、それこそが「必要なただ一つのこと」とも言えるかもしれません。暴力に満ち、虐待と暴力の連鎖の上に続けられている人類の歴史の中で、聖書も権力によって暴力のために乱用されて来ていますが、それでもなお、その中にはその暴力の連鎖に抵抗したイエス様たちの姿が記されています。それらの言葉と振る舞いに促され、私たちは今日もここから新しく平和を造る歩みへと導かれて行きます。